

## レコード無音溝の再生

レコードの無音溝を再生して一体どうするのか！とお叱りを受けそうです。

しかし、これはそのレコード盤（の溝）とそのカートリッジ（の針）との相性、及びそのカートリッジの特徴を知る上で良い方法だと思われま

こうしたことを発見したきっかけですが：

Miles Davis の「MILESTONES・・・」というアルバム（具体的には Amazon で入手した”52<sup>nd</sup> Street Records” FSST 101 LP）をデノンのカートリッジ DL-A100 で再生していたときのことです。Side A 2 曲目の”SID’S AHEAD(Miles Davis)13:07 から 3 曲目の”TWO BASS HIT(Dizzy Gillespie – John Lewis)5:12”へ入るところで、やけにテープヒスノイズのようなノイズ音が大きいことに気付いたことです。

他のカートリッジに交換してチェックしてみると、確かにノイズ音はありますが、これ程盛大には拾っていません。

改めて思い返してみますと：

- 1 DL-A100 はこのレコードの内周部分の無音溝でも、他のカートリッジとは違う独特のノイズサウンドを奏でます。  
普通はレコードの回転に伴って「プツッ」とか「ポソッ」という音がするだけです。ただし、このレコードの他の部分（トラック）では特にノイズは拾っていません。
- 2 無音溝でノイズ音を拾わないカートリッジの代表格は Ortofon Windfeld です。  
カンチレバーの動きがしなやかで、音溝をトレースする様子も猫足のようです。

DL-A100 は丸針なのでこうなるのか？と思い、同じサイズの丸針を使用しているデノンの DL-103R と比較してみました。レコードのこの部分の無音溝再生のノイズレベルは DL-103R の方がかなり低いのです。

おまけに、カートリッジ+シエルのオーバーハング値は DL-A100 が正規の 54mm であるのに対し、DL-103R の方は少し短い。

ご承知のように、レコード盤の無音溝は外周部、曲間、内周部にあります。

音溝とレコード針がどのような接触をしているかは、無音溝（特に内周部）を再生してみれば手っ取り早く分るのではないのでしょうか。